

P.01 センター長コラム  
P.02 室城先生との思い出  
P.04 新任運営委員のご挨拶  
P.05 言語・文学研究センター活動報告  
P.06 プロジェクト活動報告  
P.07 お知らせ

## 古典籍を楽しむ Ⅲ

言語・文学研究センター長 室城 秀之

私の卒業論文は『伊勢物語』でした。もう45年も前のことです。そんなこともあって、『伊勢物語』の版本も少しずつ集め始めました。『伊勢物語』はそれほど長い作品ではないので、平安時代のほかの物語の版本より安かったというのも理由の一つです。数千円のものもありました。現在、写本が1点、版本が30点ほど、『伊勢物語』の注釈書が10点ほど集まっています。

『伊勢物語』の版本には、多く絵も描かれています。その絵を見るのも楽しみです。皆さんは、高等学校で、『伊勢物語』の第九段（多く、「東下り」と名づけられています）を習ったのをおぼえていますか。「身を要なきもの」と思った男が、親しい者と一緒に、自分が住むのにふさわしい国を求めて東へと旅をした話です。男たちの一行は、三河の国、駿河の国、武蔵の国へと旅を続けます。

この段には、四首の歌が詠まれています。三河の国の八橋、駿河の国の宇津の山、武蔵の国のすみだ川で詠まれた歌（①②④）と、駿河の国で富士山を見た時の歌（③）です。そう多くはないのですが、

版本のなかにはこの四つの歌が詠まれた場面の絵が描かれたものがあります。

モノクロではわかりにくいのですが、①の絵には左側に杜若かきつばたが咲いています。②の絵では峠で修行者と出会っています。③の絵には富士山が描かれています。④の絵には左上に都鳥つづが浮かんでいます。

主人公の男がそれぞれの絵でどこにいるのかはわかりますね。男は、一人か二人の友と旅立ったと語られています。①の絵では主人公の男のほかに二人の友が描かれています。でも、②の絵ではその二人の友ではなく童わらわが一人描かれています。この童は、主人公の男の友ではありません。③の絵では主人公の男のほかに一人の友と童が描かれています。④では主人公の男と船頭と童のほかに一人の友と、なぜか僧が一人描かれています。なんともいかげんなものですが、そんなことに頓着とんちやくしないのが版本の絵なのです。

物語の内容はわかっているので、それがどんな絵として描かれているのかなど、呑みながらページをめくって楽しんでいます。



# 室城先生との 思い出



室城先生の夏の装いの定番・アケビの蔓で編まれた帽子。

## 正しさの感覚あるいは古典学への愛

(本センター客員所員 高橋 博史)

プロ野球選手王貞治の一本足打法を見たという人は、もうずいぶん少なくなったかと思うが、室城さんの一本指打法を目にした人は多いと思う。人差し指一本で、ひょいひょいと手際よくキーボードを打つ技である。室城さんは、よくパソコンに向かって打ち込んでいらっしまった。ちょっとした合間にも、何か打っている。締め切りの近い原稿でもあるのかと伺ったら、そうではなく、古典籍の本文や用例の一覧等の基礎作業をなさっているのがあった。基礎作業は面倒で億劫なこと

と思っていた私は、室城さんが淡々と、むしろ楽しげに作業なさっているのを拝見して、この方は古典文学を考究することが、本当にお好きなのだったと思ったものだった。もっともそう思うのは私が怠け者だからで、研究者としては、普通のことかも知れない。室城さんに感服したのは、その先だ。それほど古典学がお好きでありながら、決してそれを他人に強いようとはなさらなかった。人間自分が好きなことはつい人に勧めてみたくなるもので、特に教員の位置などにいると、こんな面白いことは、学生にも体験させなければならない、となったりする。室城さんも学生が古典学の面白さに触れ、味わうことを熱望されていた。しかし古典を探求することを義務として課そうとはなさらなかった。「必修を外すと学生が授業を受けなくなると言うけれど、必修でなくても学生が受けたいような授業をするよう努力、工夫するのが、我々の務めだ。」という言葉が忘れられない。自分が好きだからといって人に強制してはならない。これは至極当然なことである。しかし人は何かと理由をつけて、自分の好みは例外扱いにしたいくなる。それに対して室城さんは、まっとうなことをまっとうに実践なさってきた。それも意識してというよりも、自然な感覚としてそう振る舞われてきたように思われる。あるいは室城さんにとっては、自分が愛する古典学が誰かにとっての苦痛の種になることが、耐え難かったのかも知れない。ただ好きだということとは違う、次元の高い愛である。

古典学の素養のない私が、一言述べた機会に恵まれたのは、多く酒席を共にしたからではないかと思う。室城さんは、酒もこよなく愛していらっしまったが、酒に対する愛も、古典学に対する愛と同様だった。嫌がる人、渋る人を無理に誘うことは、決してなさらなかった。夜更けの調布で、ためらう相手の腕をつかむようにして飲み屋への階段を上ったのはいつも私で、酒への愛においても室城さんに及ばないことを恥じ入る次第です。



2004年11月開催の講座「知の散歩道」でお話しされる様子。テーマは「料理する男たち—もう一つの平安文学の世界—」



大学院生に研究指導をする2000年頃の室城先生。言語・文学研究センターにて行っていました。(編集部)



## 室城先生をお送りする

(国語国文学科 教授 油井原 均)

室城秀之先生と初めてお会いしたのは、採用時面接のときである。本館1階の応接室から会議室へ向かう途中で、「暗いので気をつけて」と言葉をかけてくださったのをはっきり覚えている。

その後、何度も室城先生と酒席で一緒する機会をいただけたのは有難いことだった。文字通りの素人である私に、古典籍写本の異同や校訂作業のこと、あるいは関わっておられた教科書制作のエピソードなどを、時に面白おかしく、時には若干の憤りを湛えつつ語ってくださったからである。先生は芋焼酎を愛飲されており、そしてたいへん酒にお強い…と記すと、「お前はどうかんだ」といつものように笑顔で追及される姿が目には浮かぶわけではあるが。

室城先生はかなり早い時期からパーソナルコンピュータを研究ツールとして導入されており、独自のデータベース構築も積極的に行っておられた。そういえば、PC設定のお手伝いで調布駅近くの職場にお邪魔して、全くお役に立てなかったのに吟醸酒をお土産にくださったことがあった。先生と一緒にしたなかで、申し訳なくも奇妙に懐かしく感じる記憶のひとつである。

室城先生は、現在の専任教員のなかで、本学が三学科構成だった時期を専任として体験した最後のお一人だと思う。長きにわたり本当にありがとうございました。どうかご健康に配慮され、今後も末永くご活躍くださいますように。

## 恩師 室城先生の思い出あれこれ

(本センター委嘱研究員 三浦 則子)

今年度ご定年を迎え、センター長をご退任される室城先生へ、メッセージや思い出話を記す機会を頂戴しました。

室城先生に初めてお会いしたのは、大学院入試の面接会場で、現在の2号館1階の学生相談室があるお部屋でした。ご著書でお名前は存じていても、お顔を拝するのは初めてだったので、机の向こうに座っている先生方のなかで、どなたが室城先生なのかもわからず、緊張したことを覚えています。今のSNS時代にはないこと、ですね。

そのような訳で、先生の印象は、先にご著書で出来上がっていたので、その後、驚き続けました。「室城先生、自転車で登場」「室城先生、真っ黄色のエキゾチック柄(?)のシャツと半ズボン姿で、夏の物研\*の大会へやってくる。頭上には、夏のトレードマークのアケビ帽!(麦わら帽子とは違うらしい)」「室城先生、カラオケで熱唱。十八番は『道化師のソネット』」「室城先生、レモンサワー、ウイスキー、紹興酒、何でも御座れ」「室城先生、ミッフィーやぬいぐるみに目がない」「室城先生、いつもポケットにコインをジャラジャラ」などなど。大学教授という堅いイメージが大きく変わりました。

先生は、王道でありながら、無頼派的な一面も。研究会の仲間から、「室城さんは、日頃は三枚目のようにしているけど、研究の話をする時、突然、二枚目になる」とも言われていました。

そして、ご定年退職を迎える年に、『うつば物語』全6冊(角川ソフィア文庫)を怒涛の如く出版されています。ご定年後の研究からも目が離せず、やっぱり、すごい先生だな~と思わずにはられません。

\*物語研究会



アフリカの伝統的な民族衣装タンキ風のシャツ。存在感抜群です。(編集部)

## 「見えざる手」と 「見えざる心」

英語英文学科 教授 平尾 桂子

2023年の春に英語英文学科に着任した平尾桂子と申します。言語・文学研究センターの運営委員を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

私の専門は社会学で、家族、教育、労働、サステナビリティの接点に関して主に計量データを用いて分析する研究を続けてまいりました。女性の学歴と労働供給（教育／労働）、妻の就労と結婚満足度（労働／家族）、母親の就労と家庭内教育投資（労働／教育）など、「仕事と家庭の調和」（Work and Family）と括られる問題群がテーマです。

社会学のおもしろさは、私たちが生きる現実そのものが研究の対象であり、理論が日常世界に新たな意味を与えてくれることです。日々のちょっとした出来事や友人との会話に研究の種が見つかることもよくあります。その例として、ここでは二つのエピソードを取り上げたいと思います。

【1】「誰のおかげでメシが食えると思っているんだあ！」——。罵声と同時にちゃぶ台をひっくり返す暴君夫のイメージを、ある種のプロトタイプとして、私たちは容易に思い描くことができます。しかし、夫に向けて「誰のおかげで仕事に行けるとしているの！」とちゃぶ台をひっくり返し直す専業主婦の姿はホームドラマでも見たことがありません。これはなぜなのでしょう。

このエピソードの、ちゃぶ台をひっくり返すのは誰かという、一見たわいのない疑問から気づかされるのは、(家の)外で稼いで得られるお金と、家の中で営まれる家事労働は等価交換されていないという事実です。夫婦の収入差異が大きい場合、一般的に収入の高い方が市場労働に専念し、収入の低い方が家事労働を担いますが、これは比較優位の原則に則った合理的な役割配分だと考えられています。比較優位の原則とは、たとえば羊毛を作るのが得意な国と自動車作りが得意な国がお互いに分業しあう方が、総量としての生産性が上がる仕組みを意味しています。羊毛と自動車がお金を媒介して交換されるのと同じように、市場労働で稼いだお金と家庭で提供される家事サービスは、夫婦の間で（暗黙のうちに）交換されています。でも、実際にはお金を稼ぐ方が威張り（ちゃぶ台をひっくり返す）、家事サービスを提供する人は泣きながら割れた茶碗を片付ける…。つまり、お金を稼ぐ仕事の価値と比べると家事の価値は過小評価されているのです。

【2】一人の子どもを大学卒業まで育てる費用はざっと見積もって3千万円。フルタイム就業の妻が出産退職してその後再就職しなかった場合、彼女が失う生涯賃金は退職金も合わせて約2億円。直接費用と機会費用、合計して2億3千万円（！）。「白金も黄金も玉もなにせむにまされる宝子にしかめやも」（山上憶良）であるとして

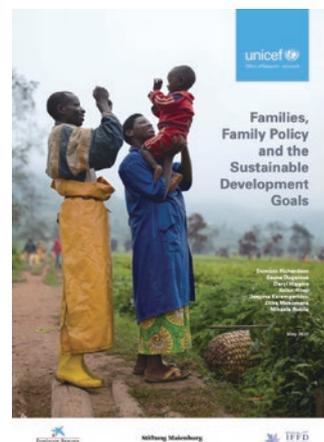
も、子どもとは、なんと高価な宝なのでしょう。

二つ目のエピソードからは育児の経済外部性の問題が見えてきます。経済外部性とは、育児が親や家族だけでなく、社会全体に対して経済的な影響を及ぼす現象を指します。具体的には、子どもが生まれることによって親は仕事を一時的に離れるか、労働時間を減らす必要があります。しかも、育児そのものにかかるお金を親が将来回収できる見込みはまずありません。一方、よりよい育児を受けた子どもは優秀な労働力として社会全体にプラスの経済的影響をもたらすのです。

言うまでもないことですが、社会はその成員が再生産されない限り持続可能ではありえません。このありふれた定理が、少子高齢化という世界の「メガトレンド」の先頭を走る日本において、深刻な社会問題となっています。この問題への特效薬は今のところ見つかっていませんが、従来の研究から、ジェンダー平等を確保し、仕事と家庭の両立をはかることが解決の鍵を握っていると考えられています。

個々人の人生における「家族」の重要度は低下したとよく言われますし、「家族」の定義も多様化しています。にもかかわらず、「家族」が子どもを生み出す唯一の制度であることに変わりはありません。「家族」が子育ての主体であるならば、母親がその無償労働の大半を担っている事実を認めなくてはなりません。男性の経済力が不安定になり、共働きが当たり前になっているにもかかわらず、男性が女性よりも家事・育児をする国はありません。世界の一般的な家族にとって、子どもはお金がかかる存在ですが（Economically Worthless）、感情面ではお金に換えられない価値ある存在（Priceless）でもあるのです。将来の労働力を育み市場に提供する「見えざる心」の価値が、構造的に過小評価されている現実が問い直されねばなりません。

合理的な人間が自由に競争すれば、おのずから秩序が生まれ、国が豊かになるという。そんな市場のメカニズムをアダム・スミスは「見えざる手」と呼びました。しかし、その手を裏で支えていたのは、市場にヒト、つまり労働者を供給する営みです。子どもを産み、育て、病人の世話をし、高齢者を介護する「見えざる心」の存在です。その価値を問い直したい。——そこに私の研究の原点があると思います。



国際会議で知り合った6カ国の研究者と世界の家族政策を評価した共同研究の報告書（UNICEF 2020）です。

🇫🇷 言語・文学研究センター主催 🇫🇷

2023年度 第1回講演会

## ブルースト『失われた時を求めて』 における庶民の言説

2023年6月14日(水) 5限

講演者：吉川一義先生(京都大学名誉教授)

コメンテーター：池田潤先生(京都大学国際高等教育院)



6月14日(水)、京都大学名誉教授の吉川一義先生と京都大学国際高等教育院の池田潤先生をゲストにお迎えし、講演会「ブルースト『失われた時を求めて』における庶民の言説」が開催された。

本講演会は、今年度前期開講の大学院オムニバス授業「大衆文化とメディア」のリレー講義の一環として実施したものである。大衆文化とはおおよそ結び付きそうにない『失われた時を求めて』の世界であるが、吉川先生は作中の庶民が発する“言い間違い”に着目し、さらに作家がブルジョワや貴族にも“言い間違い”をさせていることの意味を解いた。

今回50名を上限に参加申し込みを受け付けたが、最終的に会場にお集まりいただいた方の約半数が学外からの参加者であった。ここ数年は新型コロナウイルス感染症により規模を縮小しての開催を強いられてきたが、吉川先生・池田先生のおかげにより本来の活気にあふれる講演会を実施できたこと、お二方には心より感謝申し上げたい。

以下に、参加者から寄せられた声をご紹介します。



『失われた時を求めて』の中から、言い間違いの部分に着目し、庶民をどう捉えたかを見ると、この視点が自身の中にはないもので、大きな発見でした。さらに、言い間違いが単なる庶民を下の階級として扱う道具でなく、中流、上流の階級であっても間違えるという点はとても面白く感じま

した。言い間違いの表現から階級を越えた人間関係の図が浮かび上がってくることはとても興味深く、単なる学の無さを表現するだけでない意味として分析する視点を持つことができました。

言葉遣いによって“お里が知れる”という言葉があるように言説は、庶民／上流、地方育ち／都会育ちなどの境界線で差別化を図ることのできる一種の尺度であると考えた。ブルーストは、人は「自分の精神が属する階級の人たちと同様のしゃべりかたをするのであって、自分の出身階級の人たちと同じ話かたをするのではない」と述べていた。

現代の日本には、明確な階級意識というものは存在しないが、親の職業、出身地、経済状況などで富裕・一般・貧困という階層にカテゴライズすることで対人関係において優劣をつける傾向がある。特に地方出身者は、出身地コンプレックスを抱いている者が多く、“田舎者”というレッテルを貼られることを恐れている。そのため、訛りを隠し、標準語を話すことであたかも都会育ちを偽ろうとしているように感じる。異なる階層の人々と話す際には、自分の精神が属する階級の人たちと同様の喋り方をする点において同じ視点で捉えることができると思った。

講演の中で最も印象に残ったのは、「フランス語の言い間違いを日本語に訳す」ということである。私自身、翻訳の授業を履修しており、正しいフランス語でさえも日本語に訳すのが難しいと感じている。しかし吉川先生は、原典の中で間違えたフランス語をさらに間違えた日本語に訳すという作業をされている。これは非常に難しいことだろうし、フランス語の知識も翻訳のテクニックもどちらも必要だと思う。これからも仏和翻訳やフランス語の勉強に取り組む上で、大いに刺激を受けた。

(本センター助手 吉田 怜美)

## ● 近代文学研究会 ●

令和5年度後期の活動について報告します。オンラインにて毎週土曜日に1時間半程度行っております。使用した作品は以下の通りです。

遠藤周作『イエスの生涯』  
芥川龍之介「雛」  
小川哲「魔術師」  
奈須きのこ『空の境界』  
津島佑子「月の満足」  
伊藤計劃『ハーモニー』  
宮沢賢治「猫の事務所」

通常1作品につき2回分の時間を取り議論を進めていますが、今回例年より使用した作品数が少ないのは議論が3回に及んだことが多かったためです。その分、それぞれの作品の細部に関しても考える機会ができ、充実した時間になりました。また、今回は自由討論ではなく、参加者がレジメを作成し、それを議論の叩き台にしたことが通常より多かったです。そのため、単なる作品分析に留まらず参加者の論文執筆の一助になったのではないかと思います。

今回は、参加者の安蒜貴子さんに研究会に関してコメントをいただきましたので、紹介いたします。

私がこの研究会に感じている大きな魅力の一つは、自分からは手を伸ばすことができないような作品達に触れることです。自分自身で好んで開く本には昔から見知った友人に会うような安心感があります。けれど、書店や図書館で存在を知っていても気に留めることはなかった作品や、存在さえ知らなかった作品を読むことは、まったく知らない世界に飛び込んでいくような心高鳴る体験です。このことは、作品を深く読み議論を進めていくうえでも同じです。確かに読んだはずの文章の中に、自分自身では気が付きもしなかったような発見や疑問が浮かび上がってくる体験は本当に刺激的です。

この研究会に参加することで、私はいつも「本が好きだ」という自分を支えている根の部分のような気持ちを思い返します。そして、真摯に一つ一つの作品と向かい合っていくと背筋を伸ばしています。

そのような機会を得られるのは、様々な場所で様々な形で文学と繋がっている参加者のみなさんがいてくれるからこそだと思います。決して勤勉な参加者というわけではない私ですが、だからこそ

この会が自由な雰囲気が進み、どのような作品もどのような発想も受け入れてくれる和やかな場であることを確信をもって言うことができます。この研究会に多くの方が参加してくださり、より多くのまだ見ぬ世界に触れられることを願いつつ、これからも研究会を楽しみながら多くのことを学んでいきたいと思っています。

(本センター助手 安蒜貴子)

安蒜さんのお話の通り、本研究会では普段自分の研究だけでは触れることの少ない作品を読む機会という役割も果たしています。また、今回扱った作品のうち芥川龍之介「雛」、小川哲「魔術師」、奈須きのこ『空の境界』、宮沢賢治「猫の事務所」は特に発表者を設けずに参加者が希望する作品を自由討論したものです。ですので、ご参加を検討されている方の中で現在論文執筆をしていない方でも、文学作品に触れる機会や論文を書き始める機会として、ぜひお気軽に研究会をご活用いただきたいと思います。もちろん論文執筆前に議論をしたい方、修士課程や博士課程に在籍中の方も歓迎いたします。

研究会は毎週土曜日15時から、毎回約1時間半オンラインで行っています。隔週でのご参加、長期休み中のみのご参加などでも構いません。参加を希望される方は今後の予定やZoomのURLをお送りしますので、大塩までご連絡ください。

(本センター研究員 大塩香織)



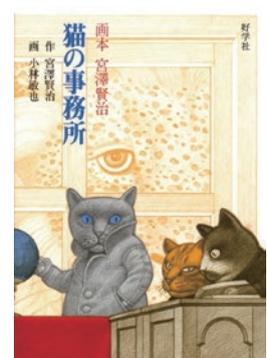
遠藤周作『イエスの生涯』  
(新潮文庫刊)



奈須きのこ『空の境界』  
(講談社文庫刊)



伊藤計劃『ハーモニー』  
(ハヤカワ文庫刊)



宮沢賢治『画本 宮沢賢治  
猫の事務所』(好社社刊)

## 🇫🇷 フランス語教育研究会 🇫🇷

フランス語教育研究会では、新しい試みとして小学校高学年から中学生を対象とした教室の開催を検討しています。以前より、年に一度開催している「プチテコ」の参加者から、「もっとフランス語を学びたい!」、「開催の回数を増やしてほしい」、「定期的なレッスンを受けたい」というような声が上がっていましたが、さまざまな理由があり、こうした希望に対応することができていませんでした。実施する場合、誰が、いつ、どこで、どのように、どのくらいのペースで、どのくらいの期間行うのか? 教材はどうするのか? など、考えなくてはならず、現時点では年1回の「プチテコ」を無事に開催するのが精一杯というのが正直なところ。とはいえ、何も対応しなければ、小学生はどんどん成長します。せっかく抱いた「フランス語を学びたい」という尊い気持ちが消えてしまうかもしれません。そこで今年度は当研究会のメンバー2名(中井珠子本学名誉教授・大塚陽子)で試験的にZoomを使ったオンラインの教室を開いてみることにしました。2022年度「プチテコ・プランタン」の4年生以上の参加者を対象に募集を行ったところ、小学4年生から中学1年生までの4人が参加を希望しました。オンライン教室としては最適な人数です。このメンバーで全10回の教室を行うことにしました。

5月から7月にかけては6回の教室を開きました。教師役は中井と大塚が交互に行うことにし、フランス語フランス文学科のネイティブ・スタッフ・ティーチング・

アシスタント(NSTA)だった北村マリアムさんにもご協力いただきました。6回の教室で、生徒たちは、フランス語でのあいさつや簡単な自己紹介ができるようになり、話せることばや好きなもの・好きなことがフランス語で言えるようになりました。毎回、画面越しではありますが、顔を合わせて会話練習をしたり、劇をしたり、歌を歌ったりしています。これまでに3つの歌「Frère Jacques」、「Au clair de la lune」、「J'aime la galette!」が歌えるようになりました。フランスの街(都市)に関する文化クイズにも挑戦しているので、フランスについての知識も少しずつ深まっています。毎回あつという間の1時間です。

8月には、フランスに住むアンナさんとオンライン交流会を開くことができました。アンナさんは日本が大好きな12歳の女の子で、日本語を学習中です。初めての試みで、どうなることかと少し心配していましたが、生徒たちはとても楽しみにしていたようです。好きなものや好きなことをフランス語でアンナさんに質問したり、アンナさんの質問に日本語で答えたり、笑顔溢れる素敵な会になりました。

10月以降も4回のオンライン教室が予定されています。そしてできればアンナさんとの交流会を再び冬休みや春休みに開くことができたらいいと考えています。

私たちもこの試みから、多くの学びを得ています。近いうちにフランス語教育研究会の正式な活動としてみなさんにご報告できるようになれば幸いです。

なお、対面式の「プチテコ・プランタン」も2024年3月2日・3日に開催予定で、多くの学生スタッフが参加することになっています。

(フランス語フランス文学科 准教授 大塚 陽子)

\*「古典籍の会」および「英語圏文化・文学コロキウム」の活動報告はお休みいたします。

## これから開催されるイベントのお知らせ

### 2023年度談話会

#### 博論を書こう——博士号を取るために

本学博士課程言語・文学専攻の博士論文を提出された方々を囲み、お話を伺います。

日 時：2024年1月23日(火)  
5 限(16時20分～17時50分)

講 師：大塩香織氏・鄭艶飛氏

開催方法：ハイブリット型(対面・Zoom)

会 場：言語・文学研究センター(本学1号館2階)

申込方法：gbkc@shirayuri.ac.jp までメールでお申し込みください。

お問い合わせ先：白百合女子大学  
言語・文学研究センター  
03-3326-5294(直通)  
gbkc@shirayuri.ac.jp



### 室城秀之先生ご退職記念講演会

#### 「女」の読み方

日 時：2024年1月29日(月)  
4 限(14時40分～16時10分)

会 場：9013教室(本学本館地下1階)

申込方法：事前申し込み制、

申込締め切り2024年1月11日(木)

お問い合わせ先：白百合女子大学 国語国文学研究室  
03-3326-5217(直通)  
kokken@shirayuri.ac.jp



こちらのQRコードからお申し込みください。



